俳句雑誌 昭和24年11月15日第1種郵便物認可 令和2年2月1日発行 毎月1回1日発行 第72巻 第2号（通巻第851号）

# 雨月

2 月 号

押し合へる顔にたばしり年の豆　　櫻坡子

二月の節分には、多くの家で「豆撒」が行われる。私の子供の頃、自分の家で行われる習慣は全く無かった。掲句は生き生きとした写生句で、どこかの家或いは神社にお邪魔して楽しんだひとこまであろう。生き生きとした風景の句である。

（大橋　晄）

風挙りきて白梅を匂はしむ　　こと枝

梅の花に近寄ってみても案外に匂はぬものだか、一方、少し離れたところで、ふっと一瞬、有り無しの風に、香を感ずることがある。作者は、余程きわやかな、そんな梅の香に遇われたのであろう、その感動を「風挙りきて…匂はしむ」の言回しをもって如実に咏出されたのである。

（浅井　青二）

PDF= 俳誌の salon

# 伊吹山

大橋　晄

冬の朝もう一眠りしたきかな

枯菊を焚いてあの世の香りとも

公園の椅子にもたれて日向ぼこ

年の暮日に日に気忙しくなりぬ

年用意何をなすかと昨日今日

今年はも寒ささほどに感じざる

PDF= 俳誌の salon

寒中に野球練習賑々し

二百五十年祭楽聖のピアノ聴く五日

千里山に雲一つなき初句会

仏手柑力強さうなる姿

伊吹山溌剌として雪白し

南面の庭に来りし冬の蝶

佐井寺の辺り冬耕始まれり

冬の日や空青くして安らけし

蠟梅の句座に流れる良き香り

PDF= 俳誌の salon

# 雨月集

## 晄選

箕面　三輪温子

前菜は菊尽しなり祝の膳
天高し木の家建てる槌の音
木道の進む他なき村しぐれ
冬温し久闊を叙す午餐会
空車庫を風の素通りそぞろ寒
島人の方言親し石蕗の花
枝を差し延べ滝を断つ冬紅葉

神戸　堀井英子

尉鶲昨日来てまた今日も来る
礼砲の二十一発秋の虹
農小屋に遺る冬帽老眼鏡
緩和病棟窓にあふるる小春の日
注射いやいや風邪の子の逃げ廻り
短日の日ざし尊し禅の庭
廃線に山の影置く冬はじめ

茨木　森脇貞子

寒林を来て人声の懐しき
案の定綿虫飛ぶや社殿裏
綿虫へ差し延べし手のやりどころ
冬ざれの堂に金色仏在し
庭畑の葱ふんだんに根深汁
鼓の音軽し小春の屋敷街
日記買ふ生ある冥加記したく

PDF= 俳誌の salon

廿日市　水田壽子

杖軽く菊の百花の女坂
牡蠣殻の山を左右に島の昼
手捌きの息つく間なく牡蠣割女
真向うて神の嶋嶺の冬紅葉
上弦の月に更けゆく神の嶋
鵯鳴いて小鳥忽ち飛散せる
大潮の瀬戸の島影月冷ゆる

高槻　金森教子

露けしや伊勢に令和の記帳して
赤福の売れ切れの札暮早し
海女小屋の寸土の畑の秋茄子
板塀の海女小屋漏るる秋夕焼
潮騒の物見櫓や冬に入る
星飛んで太平洋の闇深し
旅荷解く一人の部屋や冬に入る

神戸　栗山恵子

シャンソンの似合ふ街角冬帽子
ハミングはシャンソン枯葉舞ふ港都
干されある漁網に冬の海和ぎて
掌のくぼに息をまるめて冬に入る
風除けてゆく一輪の返り花
父の背に眠り安堵の七五三
鼬走り狭庭の闇の動きたる

宝塚　阪上多恵子

晩学に電子辞書あり文化の日
取り落とす鍵のひびきや冬に入る
斧をあげ宙をまさぐる枯蟷螂
奥嵯峨や枝打ちの音天へ抜け
手渡しに受くる佳信や石蕗の花
ラグビーの負けて大地を打つ拳
芭蕉忌の夕陽ヶ丘の夕日かな

PDF= 俳誌の salon

八尾　密門令子

大根の滋味にも偲ぶ母の恩
湖風に緋蕪干せる湖北も奥
生涯を旅に客死の芭蕉の忌
時雨るるや落柿舎蓑に笠用意
落葉して一年全うせる大樹
木の葉散り尽し一山の深き黙
冬めくと日毎に深む信貴山の翳

宝塚　片山喜久子

小春と言はむ病床の子に会ふ日
杖引きて屈むわが影冬めける
藁抱へ冬構急く里の山
たそがるる芦屋しぐれて灘晴れて
菊に集ふ老にも明日を期す心
落葉踏む音子等であり犬であり
干されゐて大根日に日に観念す

西脇　笹倉さえみ

裃のやうな肩揚七五三
鎌倉に流転の仏秋時雨
嵯峨菊の一等賞を咫尺にす
初冬や町屋そのまま資料館
山茶花の辺り夕日の昏れ残る
弁慶に泣かされてゐる村芝居
夕虹の二重丹波の初冬かな

大和　落合絹代

茶が咲いて塔頭いくつつなぐ径
三尊ををろがむ小窓笹子鳴く
源氏山のこゑ下りてくる小六月
笹鳴や実朝政子の墓どころ
境内は子らの基地なり神の留守
尼寺の竹の真みどり石蕗の花
総鎮守木の実時雨にひるみけり

PDF= 俳誌の salon

# 野牡丹集

## 晄選

近江八幡　中原吟子

兵隊の頃はの話開戦日
挙式省略指輪光らせ十二月
日記買ふ無病のほかに望みなし
炬燵へとすすめ込み入る話らし
信号に足踏み長し町師走

高槻　隅田恵子

武家屋敷頼も頼もと虫すだく
学歴は問はずとちらし文化の日
わが庭の何方向きても石蕗の花
彼岸花の高さに遊ぶしじみ蝶
近江へとつづく山脈茸採り

宝塚　片岡良子

大鷲の急降下して餌を得たる
庭園の奥を引き立て冬紅葉
五重塔映え立たせたる冬紅葉
街路樹の枯れて正面時計台
鎮守の杜枯れて釣鐘響きよし

大阪　細川コマヱ

九十八歳生きて尊し冬迎ふ
石蕗咲きて寺庭ぱっと明るうす
長生きも生き恥多し冬の朝
老いてなほ心は若し冬の朝
湯ざめしてひとりの部屋に帰りたり

同　溝内健乃

旧交をあたたむる故地文化の日
御堂筋にイルミネーション冬に入る
二上山や小春の藍を烟らせて
いざなはれ小春日和や故地を訪ひ
廃校のグラウンド茫々冬めける

PDF= 俳誌の salon

# 勾玉集

## 晄選

豊中　播磨武子

野菊濃し村に一つの駐在所
橋立の松百態の色変へず
烏瓜山はさみしと朱を凝らし
間引菜の朝日まみれの一撮み
素焼の壺まろばせ備前野菊晴

祖父江　佐藤貞子

大いなる叡山の影神渡
無明庵句座の名残の冬ともし
枯葦の風音となり鳰の湖
冬薔薇幽かな著りありにけり
腰掛けて安産願ふ石小春

愛西　荻野周子

鬼と獅子踊り狂ひて宮まつり
熟れ頃を鵯の群来て屋敷畑
錦秋の五箇山に買ふ堅豆腐
能登人の知恵稲架高く高く組む
能登の秋黄金に染まる千枚田

千里山　城戸ひろみ

藁塚に雨の重たさ見えてをり
刈田明るし一直線に風はしり
七竈の名の冬紅葉燃え上がり
綿虫を追へば忘るる齢かな
昨日より朝は色ふえ冬桜

東京　岡田正義

吉報を待つ巫女溜まり神の留守
玉砂利の音を引きずり七五三
東大にスターバックス銀杏散る
三四郎池に誘ふ朴落葉
確かむる雨戸の滑り冬構

PDF= 俳誌の salon

# 雑詠

## 晄選

身に入むや島に耕す土地無くて　茨木　蒲田　雅子
引き売りの鰯のひかる路地の風
板塀に囲ふ海女小屋秋の風
浜の日に太刀魚乾く亭午かな
利かん気の自然薯なだめなだめ掘る
髪置の機嫌取りなす祖母ふたり
子より父母の晴れがましきや七五三
冬ぬくし夜具ふっくらと日を吸へり　神戸　荻坂真稚子
滑らかな真蹟句碑や芭蕉の忌
石蕗咲きて色なき庭を明るうす
葬送にジャズの流れて冬ぬくし
遺影持つ車窓の外の冬紅葉　大阪　宮本　俊子
永別の鉄扉閉ぢられ木の葉散る
夫逝きて我も病みたり木の葉髪
冬晴れて術後の五体甦る
賀茂川の水面安堵の百合かもめ
京師走貫主揮毫の令の文字
落葉土手音従いてくるついてくる　同　塩村　瑞子

末枯るる大地のいろに馴染みつつ
メタセコイア日に燦然と舞散り来
仁王尊のすがたうべなふ小六月　同　奥畑しげみ
瀬戸大橋水軍偲ぶ冬の潮
家来つれ桃太郎像冬木影
暮はやし松前船の寄港あと
七曲り六甲に生ふ石蕗の花
立冬や北の大地の鎮もりて　四條畷　野田　光江
教会を染めて大地の冬もみぢ
茶の花や静かに暮るる隠れ里
石垣は砲台跡や冬もみぢ
百年の重み学舎の冬もみぢ
紅葉燃ゆ五十年経し学舎に
西海の秋空に向き深呼吸　豊中　岩田　登世
歓待の大漁旗あり天高し
膝掛を二枚重ねに車椅子
大の字に枯れ篠懸の葉の伏せり

PDF= 俳誌の salon

# 作品鑑賞　十月号

大島寛治　谷村祐治
西村しげ子　落合絹代
丸尾和子　中原敏雄
大橋晄

## 明らかに上昇気流滝の上　山田　夏子

滝の上の水は飛沫を上げて落ちて行く。作者は水が落ちる前に切りこみ、未知の時空を透徹した視線で滝の上に上昇気流があるという目に見えないものへの感得をされた。上昇気流という悠然たる滝の独特の把握で溌溂とした作品が生まれた。（寛治）

多くは雲を作り雨を降らす原因となる空気の流れが滝の上空にはっきり見えた即作者は一句をなされた。（晄）

## 六道の辻を曲がりて魂迎　山田　天

六道の辻は京都鳥辺山葬場の入口にあたる。その近くにある六道珍皇寺に盆前の行事としてお詣りするのが六道詣。寺の井戸（地獄の入口）の引導鐘を撞いて先祖の精霊を迎えるのだと聞く。掲句は客観的故に魂迎の期待と先祖様を偲ぶ心が含蓄。（祐治）

六道の辻の碑が京都珍皇寺の西へ建つのは有名だが、六道まいりの八月七日から十日は多くの人が迎え鐘を撞き御霊を迎える。（晄）

## 葛城山の闇をしぼりで時鳥　西村　操

「葛城山」は標高九百五十九米の修験道の霊場である。冒頭の「葛城山の闇をしぼりて時鳥」の詠出に、時鳥の強烈な鳴き声が感じ取れる。昼夜鳴きつづけると言われる時鳥の実態も伝わってくる。葛城山の固有名詞も良く句柄の大きい作品。（しげ子）

修験道最古の霊場の時鳥を「闇をしぼりて」と詠出、夏鳥として又渡り鳥となるが時鳥を称え巧みに表出。（晄）

## 禅林の恩師偲べり良寛忌　落合由季女

この句は一読するだけではすまぬ言葉の奥に深いものがあり先ず作者の人なりを知ることが出来た。沙弥で釈了幸の名を持つ。恩師とは良寛の研究第一人者で共に勉強されていたそうだ。下五の「良寛忌」が季語として申し分なく置かれている。（絹代）

良寛忌を迎えると昔仏道を共に学んだ恩師の事が回顧される仏道を修行し又桜坡子から由季女の名を与えられた作者。（晄）

## 山脈を翳濃くつらね梅雨晴間　溝内　健乃

「山脈を翳濃く」の詠出に大きな景を想像する。屹立する連峰の山襞は深く瞼しい。それだけに翳も暗く、梅雨晴の日が射し込むと全容が一変するであろう。貴重な梅雨の晴間の嘱目を確かな把握によって、掛替えのない佳句となった。（和子）

翳濃き山脈に梅雨晴間の日射しが当ると打って変って華やかな景色となる。その瞬間を捉えられ情景のよく見える句に。（晄）

PDF= 俳誌の salon